第4回

ハラル市場でのビジネスチャンスを探る
●Halal Creates the Future Food Market in Japan

HALALは日本の未来を拓く

（一社）ハラル・ジャパン協会　副理事長　**大竹　啓裕**

イスラム市場にむけて日本が動き出した

2013年9月7日、オリンピックの東京開催決定に日本中が沸いた。今回のオリンピック候補地では初のイスラム圏開催としてトルコが話題になっていたが、世界人口の25％を占めるイスラム教徒の存在感はますます増してきている。そしてさらに、12月8日には「和食」がユネスコの無形文化遺産に登録された。世界中から日本への観光客が増え、日本の和食文化が世界中へと広がっていく。この流れと勢いの先には未開のイスラム市場が存在する。

日本は石油や石炭などのエネルギー輸入を通してイスラム諸国とは良好な関係にあるが、日本からの食品輸出やサービス産業の市場としてはほとんど存在感がなかった。実は今回のこの開催地発表の前後に日本でイスラムの方々を迎え入れる新たな動きがあった。「7月25日関西国際空港がイスラム圏集客のためにハラル対応（ハラール対応）を発表」、「8月16日プレミアム・アウトレット御殿場にイスラム教徒用の礼拝所を設置」、「12月1日には成田国際空港（成田空港）がイスラム教徒向けの礼拝所を設置」。

これらのニュースは偶然ではない。東京オリンピック開催と和食の無形文化遺産登録が決定したことで、このイスラム対応のうねりは日本中で加速していくと思われる。事実、私たちの勉強会、セミナーも2012年には数回だったものが、2013年には全国の地方自治体やJA、商工会議所、ホテルなど50回を数えた。日本にとって身近になりつつあるイスラム圏とのビジネスに欠かせないのがHALAL（ハラル又はハラールと発音）で、これから数回にわたりハラルが日本の産業にどのような影響を与えていくのか伝えていきたい。

マレーシアのハラル戦略から見えるもの

ハラルを活用して、国策としてイスラム圏のハラルハブを目指しているのがマレーシアである。マレーシアは国家の宗教をイスラム教と定めていて1968年にマレーシア連邦政府総理府イスラム開発庁（JAKIM）が創設され、世界に先駆けてハラルに取り組んだ。

マレーシアのハラル認証は、もともとやむにやまれぬ事情でスタートした。同国では国教をイスラム教と定めており、以前から食品がハラルに対応しているのは当たり前であったが、近代化とともに海外からの輸入食品が多くなり始めた。特に食肉や加工食品の中にイスラム教徒にとって好ましくないものも含まれるようになり、イスラム教徒にとっては購入する際に不安になるような状況も生まれ、食生活が混乱することが懸念されたことから始まった。そこでJAKIMが流通する食品などを検査して、イスラム教徒に適切であると判断した商品には「HALAL」であると認定する仕組みを構築した。

その後、1975年の食品流通法に追加されたハラル条項において、ハラル問題の指摘がなされ、ハラル認証の申請を希望する製造業者に、ハラル認証システムのガイドラインを発行するようになったのである。

1982年には、マレーシアに輸入されるすべての食肉はハラル認証を取得していなければならないという方針を打ち出した。JAKIMは2003年7月以降、海外企業の査察や監査を停止していたが、2010年7月から再開し、海外のハラル認証団体と提携を強化すると発表。2012年1月1日時点でJAKIMが認める世界のハラル認証団体は31カ国57団体となっている。

そしてマレーシア政府はこのHALAL認証制度を発展させ、世界のイスラム市場でのハラルハブというコンセプトにてマレーシアハラルを世界におけるスタンダードなものにしようと取り組んでいる。マレーシアはハラル活用の先進国という部分では学ぶ点が多いのは事実である。しかし、イスラム教徒の多いマレーシアの国策が、イスラム教徒が少ない日本にそのまま当てはまるかというと問題も多い。世界を見渡せば、イスラム教徒が少なくても自国産業にハラル対応を取り入れて発展しているシンガポールやオーストラリアという事例も沢山ある。世界中には100を超えるハラルマークの発行機関があり、沢山の国家戦略での成功例もあるのでマレーシアにこだわらずに学ぶべきだと思う。

各国のハラル認証マーク

ハラル認証マークの発行は宗教団体や非営利法人が行っているので、国に1団体ではなく複数の認証団体が存在する。1国1認証マークの代表はマレーシアやシンガポールだが、むしろそちらが希であり、世界中で発行されているハラルマークでは代表的なマークだけでも100以上存在する（**図1**）。国が管理するハラル認証の代表格がマレーシアであり信頼度が高いと言われる所以でもある。

イスラム文化圏の食市場

近年、世界中で和食が爆発的に広がっているが、それが「日本の和食×ハラル」に無限の可能性を感じさせてくれる。2013年3月時点では、世界